

「越中福岡の菅笠製作保存会」視察研修視察報告

場所：富山県高岡市

日時：2014. 1. 21(火) 9時40分～17:00

参加者：副理事長・三森和裕 理事・伊藤隆二 理事・松田伸一 事務局・神尾康彦

応対者：保存会事務局長（高岡市福岡総合行政センター所長）徳田光太郎

保存会事務局（地域振興課課長補佐）橘 美和子

同企画調査員 梅 亜紀枝

保存会理事他5名

見学先：笠骨工房＝保存会会長 木村昭二氏（87） 菅笠縫職人宅＝田宮絹子氏（84）

I. 視察聴き取りのあらまし

1. 菅笠生産体制の現状

- ・スゲ栽培農家 43 戸（平均 79 才）笠骨職人 1 人（87） 笠縫い職人 75 人（平均 78 才）
問屋 3 軒
- ・生産枚数 5 万枚
- ・各地の菅笠生産が激減している中で、全国から注文が来るが、職人不足から応じきれない。

2. 課題

- ・機械化できないスゲ生産供給の維持。
- ・加賀藩時代からの生産販売まで分業が今も続いているが、笠骨職人、縫い職人の高齢化と担い手不足から体制維持に危機感がある。
- ・安い取引価格が産業化後継者育成を阻んでいる。

3. 振興対策

(1) スゲ栽培の推進

- ・栽培補助金制度 10a 当たり 8 万円の補助で現在 80a～1ha の栽培面積。生産組合の協力で拡充。
- ・スゲ生産組合の設立（25 年 8 月） JA 因幡の稲作農家の協力で、栽培量拡大と品質、価格の統一を目指す。
- ・栽培マニュアルの作成

(2) 職人育成

- ・笠骨職人育成：指導職人と研修生一組に年間 60 万円と材料費 60 万円を支給
- ・笠縫い職人育成：研修生 3 人（26 万円）
- ・技術者表彰事業

(3) 連携強化

- ・菅笠保全対策会議（H25～26）：国、県、市、学識経験者、問屋、職人、栽培農家

(4) 新製品ブランド化事業

- ・デザイン工芸センターとの連携、ブランド化ビジョンの作成

(5) 広報の強化：会報、ホームページ、イメージキャラクター、専従職員の配置

B. 考察

当地区の菅笠は国の重要無形民俗文化財となっており、全国の9割の生産高を現在も保っている。その特徴は400年来の生産から販売までの分業体制が維持されていることである。全国的に実用品としての需要が激減している中、今でも舞踊、民芸、祝祭礼での全国の需要がこの福岡に注文が集中している。山形花笠も代表的な商品の一つとしてパンフレットやショーウインドでも随所に紹介されていた。山形にも相当数の出荷があるものと思われる。

現在は行政主導による地域振興として厚い支援体制や予算があり、スゲ生産は農家が担っているが、高齢化する製作職人の担い手不足は製品としての低価格が解消されない限り、育成には限界がある。産業としての取引であり、行政主導の支援では難しい課題のように思われた。

- ・笠骨については少量多品種の注文に応えるためにはまだ職人の竹細工による骨笠作りは欠かせないが、長期的な一定量の需要のある笠については山形花笠を含めビニール骨への移行が一気に進むと思われる。

- ・一日2、3枚が限度の手作業の笠縫いの生産性を上げるには、より巾広の材料に移行することが予想される。当地栽培のスゲが丈2mと長いのも巾広のスゲの需要に応じたものだろう。中津川の細い縫い目の美しさを見せる笠は、熟練の技による希少で高価なものとなっていくと思われる。高価な菅笠が市場性を持つには、新たな商品による需要の開拓とブランド化が大きな課題で、当地区保存会の取り組みをこれからも注目していきたい。

- ・会議室に展示頂いた笠は、スゲの品質、縫いの細やかさは全て一級で、どれも金色の色彩を放っていた。しかし年間5万枚の需要にこたえる一般の笠は価格と納期に相応する品質と見てとれ、中津川で作られている花笠や注文製作の笠は質的に上位を維持していると思われる。

- ・私たちのこれからの取り組みは、中津川に伝わる素材にこだわり、現在の品質を保ちながらスゲ栽培、素材加工、笠縫技術の継承活動を積み重ね、次の世代に繋げていくことが大事だとの想いを新たにしたい。

報告者：事務局 神尾康彦